

第二期 第一〇五号

(二版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2025. 04. 10 定有堂書店 発行

エスキース

『本屋のパンセ』を届ける旅

福本和夫が逗留した本郷菊富士ホテル跡地へ

草の一本の営み

のこり物

過程と共有される面白さ

日々是雑言 (ぞつごん) 3

Walk on By

本を作る側から (25)

マンネリじゃないです素振りです

汽水のほとりから (48)

書庫をさすらい

内坪井町日記 (11)

ディストピアとの出会い

めだかのマーチ

オムライスル

奈良 敏行

三砂 慶明

岩田 直樹

白井 明大

おぎはらきえ

板野 円香

萩原 俊郎

高木 善祥

村瀬 謙介

古賀 啓三

小原 修治

ムラカミヒロミ

齊藤 仁昭

三浦 永理

あきの素生

ドラメリア

エスキース

奈良 敏行

(定有堂 主人)

倉吉市で古書店「エスキース」が開業するので訪問した。
二〇二五年三月二一日。数日冷え込みが続いたが、この日は二十数度の汗ばむ日だった。鳥取駅からJRで五十分。倉吉駅には萩原俊郎さんが迎えに来てくれていた。車高の低いしゃれた車で、フォルクスワーゲン・ビートル。デニムブルーだった。

「エスキース」の一台分の駐車場に車を収めると、予告はしてなかったのだが、気配をさっして米原さん夫妻が出迎えてくれた。自宅の居間を改装しての八坪の本屋ということだったが、白い壁、黒い書棚の落ち着いた、書齋のような店内だった。

四人掛けのテーブルもあり、くつろがせてもらった。待ち合わせたわけでもなかったが、定有堂教室の仲間の黒崎毅さんが突然現れ互いに驚いた。出雲から駆けつけたのだ。地元「倉吉ブックセンター」の円谷さん(父)も登場し盛り上がりってしまった。わたしにできなかった「ひとり本屋」。

円谷さんはショッピングセンターから自宅店舗へと縮減することに成功した。「エスキース」は、この「縮減」の地点からスタートする。二人は初対面だった。

店名は奥山淳志『庭とエスキース』（みずす書房）からとられている。北海道の林の中に小屋を建て、習作を描き続けた弁造老人の話だ。

《絵を完成させるということは、弁造さんにとってそれほど大きな意味を持たなかったのかもしれない。》

弁造老人は、土を耕すことと、小屋の中で絵を描くことが好きだった。著者は寄り添うように写真を撮り、そして消息を本にした。

米原秀明さんはこの道を辿り、「エスキース」という限定あるいは「縮減」の立ち位置を、受け継ぐと決意する。いま七十歳、後五年でできれば十分だという。自分の生命がいまどこに立っているのかを自覚しつくしているという意味で弁造老人に似ている。未完のまま（エスキース）の本屋を五年続ける。みづことな意志表示だと思う。

「エスキース」の品揃えは一人の読書人の美学のもとに選書され、完璧なものだった。米原さんに本屋を開くきっかけは何だったのですかと聞いたら、鳥取県立図書館の家庭で行われた「一箱古本市」に参加したことだったという。この時、米原さんはこんな風に思った。「一箱」の本を挟

んで本好きの人と対話する、学生時代本屋でバイトした記憶が甦る。接客は楽しかった。もう一つの人生だったかもしれない、選択しなかった分かれ道を、残りの人生で辿り直すことは、とても贅沢な選択に違いない。

あの時、米原さんの「一箱」の本には透明なビニールがかけてあった。自分の大事な蔵書だからだという理由だった。五年ほど前の話だ。

今日棚を見渡すと、全部の本に透明なビニールがかけてある。聞けば、自分の蔵書だからだと、きつと答えるに違いない。人文書を俯瞰する品揃えだ。米原さんの個人の本棚から選び出した本だ。読みたいと思って買ったものの、まだ読めていない本のほうが多いと弁明するが、どんな読書をしてきた人なのだろう。気になった。

学生時代は文学部で史学を学んだ。学びはつづきエディタースクールで一年編集や出版の知識を身につける。そして業界大手の医歯薬出版に就職する。医学関係の編集、そして管理職を経て停年。生まれた土地に帰る。学生時代はフランクフルト学派、特にホルクハイマー『哲学の社会的機能』を熟読する。編集者時代は中井久夫を読破する。『家族の深淵』（みずす書房）が愛読書だ。編集者時代の思い出はと問うと、徳永進医師の原稿をあと一歩でもらえなかった事だと振り返る。店内に徳永さんの著書は三十冊以

上揃っている。『死の中の笑み』は平積みにしてある。見かける度にこの本は購入したのだという。

蔵書を見渡せばすぐに独自の読書歴を持つ人なのだとわかる。この人がエプロンを掛け、やや震える手でレジ打ちしているのがほほえましかった。いま最高に幸せなのだ。

黒崎さんがこの店のお宝本は何ですか、と聞いた。ハン・ガン『少年が来る』、奈倉有理『夕暮れに夜明けの歌を―文学をさがしにロシアへ行く』、そして『家族の深淵』だった。わたしにその意味するところはわからなかった。でも黒崎さんは理解したようだった。

帰りは黒崎さんに倉吉駅まで送ってねと頼んだ。遅いランチをどこにしようかと相談していたら、奥さんが「元町珈琲」を教えてくださいました。結局二人で「牛タンシチュー」を食べた。

帰り際に、黒崎さんは「エスキース」の前庭を見て、いずれ雑草が出そうだと指摘した。農業はプロなのだ。この農業の人は大きな箱いっぱいくらいの本を買った。さらに加えてミヒヤエル・エンデの全集

も。駅まで送ってくれた車は、フィット・シャトルだった。

2025.03.22

(参考)

奥山淳志『庭とエスキース』みずぶ書房 2019

マックス・ホルクハイマー『哲学の社会的機能』晶文社

中井久夫『家族の深淵』みずぶ書房 1995

徳永進『死の中の笑み』ゆみる出版 1982

ハン・ガン『少年が来る』クオン 2016

奈倉有理『夕暮れに夜明けの歌を―文学をさがしにロシアへ行く』

イースト・プレス 2021

ミヒヤエル・エンデ『エンデ全集』（全19巻）岩波書店 1997

～2006



奈良敏行十三砂慶明編

『本屋のパンセ』 作品社 二〇二五年三月五日刊行

『本屋のパンセ』を届ける旅

三砂 慶明

(「読書室」主宰)

奈良敏行さんの新刊『本屋のパンセ 定有堂書店で考えたこと』(作品社)を届ける旅を続けています。

2月23日は神戸1003、3月2日は東京の紀伊國屋書店新宿本店と千駄木の往来堂書店、3月8日は福岡のブックスキューブリック箱崎店にそれぞれお邪魔してきました。1003では店主の奥村千織さんと、奈良さんの「商店十年説」を入口に、1003の十年を振り返りました。1003と地域とお客様とのかかわりを拝聴しながら、開業当初から扱っていたリトルプレスとZINEについて伺うことができました。私はずっとZINEをマガジン(magazine)の略語だと思っていたのですが、実はそうではなくて、マガジンから派生した「ファンジン(fanzine)」から独立して生まれたのが「ZINE」なのだ教えていただきました。奥村さんが紹介してくれた『ガールズ・メディア・スタディーズ』を読むと、「有志による非営利・少部数の自主制作出版物」と簡潔に定義されていて、「ジンは、個人的(パーソナル)でありかつ政治的(ポリティカル)であること」(131頁)

と踏み込んだ紹介がなされていて驚きました。奥村さんが「ZINE」と呼び、紹介し続けている熱源に触れることのできた夜でした。

紀伊國屋書店新宿本店では前著に続き、本店長の星真一さんとお話させていただきました。星さんからいただいた質問で印象に残っているのは、なぜこの本のイベントを「書店」で開催したのですか、という本質的な問いかけでした。その質問の背景には、奈良さんがずっと「小さな声」を大切にしてきた町の「本屋」だったということに対して、新宿本店の役割はむしろ「大きな声」で社会に向かって発信をする「書店」だからだと思います。

書店と本屋、都市と地域、大きな声と小さな声。この二つをそれぞれつなぐものとは何だろうと考えてみたものの、口について出た言葉は、「紀伊國屋書店新宿本店が好きだから」でした。星さんから「この本は、書店とか本屋とか、そういう立場や役割、流儀や流派をこえて読まれる本であり、詩のように美しかった」と読後感を語っていただきました。本屋だけでなく、書店にも届く本なのだということが教えていただきました。

夜はそのまま千駄木の往来堂書店にお伺いして、店主の笈入建志さんとお話させていただきました。笈入さんが奈良さんに問いかけたのは、「本屋を学び続ける人が集まる

場にするためにはどうしたらいいか」でした。奈良さんは、今井書店の永井伸和さんの言葉、「人が集まる場所にはギャラリーが必要だ」を紹介しながら、町の中にはやりたいと思っている人がいるから本屋という場所があればそれはきつと実現できる、と応答しました。また箕入さんからは、九十年代以降のPOSシステム導入に伴い、書店員の間の断絶、「スリップ」という思考法が失われているのではないか」という問題提起がありました。スリップは、お客様がどんな風にその店を歩き本を買ったのかが見える本屋のツールであり、その経験がある書店員とそうではない書店員には明らかな違いがあるように見えるとの気づきをいただきました。

キューブリックでは、大井実さんと奈良さんという気心の知れたお二人の温かい交流でした。対話の中心は、「好きなことを好きでい続けること」、つまり「初発衝動」についてでした。イベント後に、大井さんに奈良さんが成し遂げてきた仕事の本質って何だと思えますかたずねると、「探求することじゃないですか。人生のわからなさをお客様と一緒に探求する姿勢」とまっすぐ言葉が返ってきました。

4月25日からは、『町の本屋という物語』の推薦文を書いてくださった辻山良雄さんの本屋「1111階ギャラリー

で、「定有堂書店」のエッセンスをよみがえらせる展示を開催していただきます。往年の定有堂書店のベストセラーから辻山さんがセレクトした本を、奈良敏行さんの言葉とともに並べます。在りし日の店の姿を伝える写真や絵、実際に定有堂にかけられていた額など、かつての書店の息吹を伝えるものも展示していただきます。4月29日は、辻山さんと三砂で、奈良さんの言葉を手掛かりに、本を売ることを、本を読むことについてお話しします。

待ち合わせは定有堂書店で。ご来場お待ちしております。

・「定有堂書店」という物語

奈良敏行『本屋のパンセ』『町の本屋という物語』刊行記念展示「本屋「1111」 2階ギャラリー

2025年4月25日(金)から2025年5月13日(火)

(編集部注)

三砂慶明 『千年の読書』 誠文堂新光社 2022

三砂慶明 編著 『本屋という仕事』 世界思想社 2022

三砂慶明 編著 『町の本屋という物語』 定有堂書店の

43年『作品社』 2024

三砂慶明 編著 『本屋のパンセ』 定有堂書店で考えたこと『

作品社 2025

福本和夫が逗留した本郷菊富士ホテル跡地へ

岩田 直樹

（再解釈本舗・「読む会」講師）

前回、橋田邦彦、福本和夫、前田寛治の接点を探ろうと東京・本郷を取り上げた。今回は、失敗した実地検分？レポートである。

先月、北関東の親戚宅へ行く機会があった。往路は自家用車、復路は新幹線＋飛行機。車を届けるのが目的の一つだった。

ついでに八年ぶりに日光へ行ってみた。日光に近づく
と雨から吹雪に変わり、道路は圧雪状態。除雪車が頻繁
に通る、JAFが待機している。いろは坂を上り下りす
るのは雪国の住民である私にとって難しくないのだが、
中禅寺湖畔の温泉で宿泊して帰ろうとしている南関東ナ
ンバーの車はノーマルタイヤらしく、あちこちで立ち往
生している。

気温はマイナスなのに、薄着の外国人観光が大勢いる。

東照宮の参観をあきらめ、戦場ヶ原をＵターンして鬼怒

川から会津西街道を北上。塩原温泉を経由したロング・ドライブとなった。

翌朝、午後一時台の飛行機で帰る前に本郷に寄つてみよう、と思いついた。昼過ぎには羽田空港で保安検査に並ばなければならない。実質的な滞在時間はわずか二時間ほどである。

急に思い立ったので、新幹線「なすの」の中で効率的なプランを練る。御茶ノ水駅から千代田線で根津駅へ、言問通りから東大キャンパスを抜けて本郷菊富士ホテル跡地へ、本郷三丁目駅から御茶ノ水駅へ。

上野駅で新幹線を降り、秋葉原駅のコインロッカーに荷物を預け、御茶ノ水駅へ。コロナ禍前には残っていた総武線各駅停車と中央線快速のホームの段差が解消されている。東京オリンピック対応でバリアフリーが進んだのだろうか。

根津駅から前田寛治の通った東京美術学校（現東京芸大）までは徒歩一〇分ほど。楽器を抱えた学生が歩いている。このあたりは谷根千（谷中・根津・千駄木）といって下町の雰囲気を感じられる地区である。

私は学生時代、根津駅から五分もかからない広大な谷中墓地の中、某寺の裏に住んでいた。すぐ近くの「三味

線横丁」では、夕刻には粋な音色が聞こえていた。塀に囲まれた墓地の中を銭湯に通った。

根津駅すぐそばの吉野家は数軒先に移転していたが、馴染みの洋食屋や定食屋はなくなっていた。四〇年近く経っているから当然だろう。驚いたのは、言問坂に面したスーツの仕立屋がそのままであったことである。店主もお得意様も代替わりしているはずだ。

坂の途中にある「弥生式土器発掘のゆかりの地」の碑を左折して、弥生門から本郷キャンパスに入る。安田講堂から法文一号館のアーチをくぐり、医学部、教育学部、経済学部の横を通り、現在改修中の赤門へ。

さて、ここからが本番だ。

一九一四年に開業、四五年三月一〇日の東京大空襲で焼失した菊富士ホテルには、谷崎潤一郎、宇野浩二、広津和郎、直木三十五、尾崎士郎、宇野千代、坂口安吾、竹久夢二、石川淳、大杉栄、伊藤野枝、中条（宮本）百合子、三木清（順不同）ら数多くの作家、芸術家、思想家が止宿した。戦後の山の上ホテルを連想させる。近藤富江『本郷菊富士ホテル』（原著一九七四年、中公文庫一九八三年）は、ホテルで繰り広げられた人間模様を活写する。

逗留者の一人に福本和夫がいた。欧州留学から帰国して二年後、一九二六年六月から半年近く滞在している。同年二月から六月にかけて初期三部作『社会の構成並に変革の過程』『無産者階級の方角転換』『経済学批判の方法論』を刊行し、よく売れて羽振りがよかった。ある嫌疑で元富士署の刑事が福本の部屋を搜索したとき、七千円記入の預金通帳が無造作に置かれていたという。現在では約一千万円になろうか。福本は一二月に第二次共産党を設立し、地下に潜入する。

近藤本にはホテル付近の地図（当時と一九七三年の二つ）が載っている。本を持参しておらず、ボンヤリとした記憶に頼って歩く。本郷通りから菊坂を下り、右折、左折して長泉寺に出る。ホテル跡地には水処理プラント・メーカーの本社があつたが、三〇年ほど前に移転したらしい。「本郷菊富士ホテルの跡」の石碑は見つけられず、「多分このあたり？」で調査終了。時間切れであつた。地下一階、地上三階（尖塔に一室あり）、客室五〇、建坪四〇〇坪のエキゾチックな建物（四一頁の写真参照）が残っていれば、と思わずにはいられない。VRを制作する人が現れないだろうか。

草の一本の営み

白井明大

(詩人)

『ヘリヤ記』の二巻を書き上げて、印刷所に入稿するた
めの原稿の最終確認をしている。

ふりかえると今回は鳥取のさまざまな場所を訪れたり土
地の話を聞いたりしたことで、物語の舞台を想像するうえ
で、見聞きできたことが空想に少しでも確かさを伴わせる
手がかり、足がかりを与えてくれているように思える。

草の一本にも土や風、光、天候や季節のめぐり、そもそ
もの植生や人間社会からの影響など、考えるほどきりがな
い事柄が関わり、影響を及ぼしあつて、描写をおろそかに
できないと思うと、いまさらながらファンタジーに手を出
したことにののく。

それでも書きたかったという気持ちは揺らぐことなく、
ほんの断片でも、言葉が届くかろうじての一面だけでも、
筆を止めるより動かすほうへ向かい、一語、一句と書き連
ねている。

ノルという穀物を一卷に登場させた。荒れた地、過酷な
環境で育つ、ヘリヤの物語世界における穀物。ポジット種
という植物群に属する。モデルではないけれど、現実にし
ばしば私たちが口にするとある穀物のことを頭に置きな
がらこのノルを想像していった。

その現実にある穀物に関しては有名な逸話があり、知つ
ている人も多いのではないかと思うのだけれど、二巻の推
敲をしているさなかにあつた昨秋に、その逸話を再確認で
きるような若桜の先の山あいの地へ訪れる機会を得られた
のも機縁のひとつだった。

穀物の種を携え、地にまぎ、育て、収穫し、糧とする。
このことのひとつひとつに厚みをもった人間の営みの層があ
る。倭の国には種をまく季節と収穫する季節の二つがある
(二つしかない)という記述が「魏志倭人伝」に見られる。
逸話の穀物と同じ作物の種かはわからないが、時間の層と
は少なくともそのくらいの厚みをもつのではないか。

かたわらにゲラがあり、一卷の三倍のページ数になつて
それなりの厚みをもっている。草の一本の背後に積み重な
る時間の層、また営みの綾を物語にどれだけ書き得ただろ
う。新たな植物も登場し、それぞれに物語の一端を担つて
いる。

一卷が小石をめぐる話であつたとすれば、今回の二巻に

はまたこれといえるものが浮かぶ。糸をたぐるように物語のほんの断片を書き綴っては、その先を、先を、とつとつとおぼつかない足どりで拾っていく。そのように記している。出来あがったら、またきつとつとつと三巻に取り掛かるだろう。物語がどんな姿となるか、まるでわからない。

物語にかぎらないけれど、なにか書くこうとするときは、なぜだか時が経つことによつておのずと解決する、というような根拠のないことを心に持っていて、ひたすら時間をかけることにしている。ここ数十年ほど、そんなふうにしてきた。

迷い道のようなところに立っていると、どちらへ行つていいかわからない。わからないから、じつと立ち止まっている。いつまでもいつまでも立っている。そうするとやがて、なんの根拠もないけれど、言葉で説明できないけれど、なんだかこつちの道へ、心が、体が行きたがつている気がする、というふうに、じぶんの内から動くこうとするものが現われてくることがあって。そうなるまでは、迷うなら迷うまま、わからないならわからないまま、なにかが胸に落ちるまであわてないで、力まないで、ただだん通りにしていることが多い。

二巻にはノル以外にもいくつかの野草が、ひっそりと登場する。そんな草がどこかにあるとしたら、たとえそ

れが現実のこの世界ではないとしてもちょっとうれしい。現実にはない世界に、空想の草が生えていると考えると、なぜうれしいんだろう。いてもおかしくない、というのは、ある可能性の姿かたちを見出すよこびなのかもしれない。

ヘリヤの草木花をまた書きたい。どんな種で、どんなふうに育つて、どんな花を咲かせて、どんな味がある実をつけるのか。

(参考・編集部)

白井明大 『日本の憲法 最初の話』 KADOKAWA 2023

白井明大 『着雪する小葉となつて』 思潮社 2021

白井明大 『一日の言葉、一生の言葉 旧暦でめぐる美しい日本語』 草思社 2018

白井明大 『生きようと生きるほうへ』 思潮社 2015

のこり物

おぎはら きえ

(蔭山)

プレーンヨーグルトが余った。四〇〇グラム入りの無糖のヨーグルト。腸のために毎朝食べようと思って買ったのだが、容器から食べる分だけ器に移す行為が面倒な時もある。それで食べ逃すと開封から一週間過ぎても食べ終わってなかったりする。晩に食べてもいいんだけど、ヨーグルトって朝って感じがする。

なにか他の料理にでも使えないか。そういえば鶏肉をヨーグルトに漬ける料理があったな。それをやってみようか。

それはキューライス著『ひとり事 キューライスのサクセスごはん』（白泉社）で紹介されていたタンドリーチキンで、このレシピを参考に作ってみることにする。鶏もも肉は買ってくるとして他に必要な材料は、「ヨーグルト」ある。「すりおろしのニンニクと生姜」ある。「クミンパウダー」ない。「チリペッパー」ない。「ターメリック」ある。もはや何年前に買ったのか分からないのが。「カル

ダモンパウダー」ない。「塩」ある。

余ったヨーグルトを消費するためにクミンパウダーとチリペッパーとカルダモンパウダーを買い足すのか。スパイスって買うのになんと逡巡する。

うちにあるいつ買ったか分からないターメリックというのは、市販のルーを使わずココナッツミルクとホールトマトを使ったカレーを作ってみた時に買ったものだ。ココナッツミルクとホールトマトで作ったカレーはそれはそれで美味しかったけど、ルーはスープ状にさらさらしてて、私はルーはどろどろ派なので「また作ろう」という気にならず、以降ターメリックの他、カイエンペッパーとパプリカパウダーが出番なく台所の棚に残された。

他にも何年も残っているスパイスが色々ある。たとえばシナモン。フレンチトーストに使いたくて買ったのだが、そんなにしょっちゅうフレンチトーストが食べたくなるわけでもなく、何度か使ってはいるが空になる日はまだ遠い。ナツメグ。肉料理に使ってみたくて買った。ハンバーグに入れるとお店で食べるような豊かな風味になるのだが、そんなにしょっちゅうハンバーグが食べたくなるわけでもなく、以下同文。この間久しぶりに作ったが、焼いている最中にナツメグを入れ忘れていることに気がついて、持っていたフライ返しを投げ出したくなった。出来上がったハ

ンバーグは野生味（肉臭き）があった。

というように普段のおかずは和食が多いのでスパイスを使う習慣があまりない。なので新しい料理にチャレンジしてなにかしらのスパイスを買い足すと、普段はその存在を忘れ何年も棚に残ることになる。

今回作りたいタンドリーチキンの材料、チリペッパーはカイエンペッパーでいいだろう。クミンとカルダモンは、しょうがない、買うか。

いつも行くスーパーに買い物に行く。クミンはあったけど、カルダモンが無い。他のスーパーに探しに行くほどの徹底さはなく、また使わずに何年も放置されるスパイスを増やさなくて済むし、カルダモン抜きで作ることにした。

『ひとり事』は漫画、イラスト、絵本と多彩な活動をされているキュウライスの趣味の一つである料理を描いたエッセイ風漫画だ。主人公の坂元（著者の本名）は独身、自宅兼仕事場のアパートに一人暮らし。己一人のためだけに日々料理の腕をふるう。故に『ひとり事』、なのだがもう一人の登場人物として坂元に取り憑いている（坂元自身は気がついていない）女性の幽霊ハルがおり、彼女が都度つつこみを入れたり一緒に料理を味わったりして、坂元はひとりでしゃべったり料理を楽しんだりしているのに会話が成立しているような妙な掛け合いが生まれている。

本屋で料理本コーナーをのぞくと「時短」や「ズボラ」を謳ったレシピ本が面陳されていて目を引く。何分で作れるか、どれだけ最小限の材料と工程で料理ができるか、本棚で静かにバトルが繰り広げられているようだ。食事は毎日の必須行為だが、仕事で疲れて作る気力がないとか、栄養バランスと自分が食べたいものと家族の好みの兼ね合いとか、食材費の高騰とか、考えるのも用意するのも面倒になるときがある。だけど『ひとり事』はそういう社会の喧騒・圧力とは距離を置き、竜田揚げ、グリーンカレー、汁なし担々麺など料理のジャンルを問わず自分で作って自分で食べて堪能し「ありがとう自分!」「愛してるぞ自分!」と独り言を言っている。羨ましくなつて私もついあれこれ作ってみて「ありがとう自分!」と言ってみる。で、スパイスが残る。

作ったタンドリーチキンを食べてみた。味はいいけど、なにか風味が物足りない。やっぱりカルダモンかー。

（著作）

おぎはら きえ『迷妄蒙昧』 蔭山 2025

過程と共有される面白さ

板野 円香

(薬剤師・岡山県在住)

ここで一つの疑問が浮上する。

「その語尾は果たして岡山出身者にも有効なのか？」

私は生まれも育ちも岡山で、加えて幼少期は祖父と祖母に面倒を見て貰っていたため、友人曰く「強め」な岡山弁ユーザーらしい。岡山弁として典型的なのが、「ワシ」という一人称と「○○じゃ」という語尾。この点だけに着目するなら「博士言葉」と一致する。今は流石にいないだろうが、私が中高生だった時代には、照れ隠しに「ワシ」という一人称を使う女子も存在した。つまりその時代を生きた私にとっては、指定された役割語を使うのは至って自然なことであり、意識的にその語尾を使ったからといって学位取得前後で私に何ら変化はもたらさないのである。

このやり取りを知っている先輩だけが、キヤツキヤ喜ぶだけであろう。さて、この過程を知って面白さに気づく、というのは、別の機会で私自身も体験することとなる。

実は卒業式と同日の夕刻、定有堂教室「読書室ビオトップ」の常連でもある黒崎さんに誘われ、岡山と島根にゆかりのある作家さんのトークショウに参加したのだった。二十日のメインイベントと言ってもいいだろう。式後の先生方への挨拶まわり、同期との会話もそこそこに、スーツ姿のまま岡山芸術創造劇場ハレノワに向かう。

今回トークショウでお話くださるのは上島菜緒さんとい

二〇二五年三月二十日（祝）、大学院の卒業式・学位記授与式に参加していた。「薬剤疫学」という分野で働きながら研究を続け、この度なんとか博士後期課程を修了できたのだ。社会人研究生として、大学の門を叩いたのが今からもう四年前のこと。入学と同時に新型コロナウィルスが猛威を振るい、逼迫する業務と履修の調整、社内外的学術活動と自身の研究の同時進行は、予想以上に大変だったが、振り返ってみるとあつという間だったように感じる。いずれにせよ一区切り付いたのだ。そんな私にある先輩が笑って言った。

「大学院お疲れ様。博士になったからには、語尾は『くじゃ』にしなきゃね！」

要するに、名探偵コナンの阿笠博士みたいに「ワシじゃよ、新一」とか「カツ丼食うのじゃ」（「多分言ってるのか、たらしめる「役割語」を持って言うのだ。しかしこ

う作家さんで、三月の読書会の課題本「イグアナの花園」を書かれた方である。私自身は、三月の読書会には参加できずであったが、このイベントのため本書は読了済であった。思いやるが故にどこか不器用な登場人物達、メロウで豊かな情景描写が心地よい、そんな小説であった。

トークショウでは主に、「イグアナの花園」の紹介と、執筆にあたっての経緯、上畠さんの幼少期が語られた。ちなみに上畠さんのご両親も同席されており、アットホームな空気感で会は進行していった。

「イグアナの花園」では、動物の言葉が分かる美苑の視点を中心に話が進んでいく。

主人公の美苑は、植物学者で大学教授の父と、厳格な華道家である母の間に生まれ、小さい生き物たちとコミュニケーションが取れる一方で、人付き合いが苦手であるため「空気が読めない」子として周りからは認識されている。そんな彼女の日常の中核には、一緒に暮らす「ソノ」というイグアナの存在があり、現実世界に直接的には干渉しない「ソノ」（や、その他キーフアクター）を通じて、美苑は少しずつ成長を遂げていく。

あらずじは大体この様な感じであるが、最期は涙なしには語れない内容となっているので、未読の方は是非とも手に取って頂きたい。上畠さんならではの、優しきの詰まっ

た風呂敷の閉じ方だったように思う。

物語もさることながら、私が特に唸ったのが「豊かな情景描写」と美苑の「観察眼」についてであった。作中にはイングリッシュガーデンを連想させるような庭園の記述や、打って変わってアオダイショウの体鱗の鮮やかさを描写したシーンが現れる。つまり、広角レンズを通したかのような絵画的な景象を捉えたかと思えば、次にはマクロレンズを通して視たような、小動物の筋繊維の動き、傷の治癒過程などが詳細に描かれているのである。こんなにも動物に詳しい（特に爬虫類）のは、生物学でも専攻していたからだろうか？ 上畠さんは次のように語る。

「昔から動物は好きで、美苑のように動物をずっと観察していた。もちろん爬虫類もだが、生きもの全般が好き」

ストンと落ちた。知識として得たのでない、自身の観察日記だったのだ。私は該当箇所再度目をやる。文章の裏に熱心に小動物を観察する幼い上畠さんを見た気がした。

本とは面白いもので、動物が好きな人の視点を間借りして世界を見る事もできる。与えられた結末は変わらなない。でもこの面白さを知っているのは、このやり取りを共有した者たちだけだ。

日々是雜言（ぞうごん） 3

萩原 俊郎

（倉吉市在住者）

日ごろ気になることを、つれづれなるままに。

ピースメイカー

米国人のネーミングのセンスって、どうなのよ？（石破総理のものまねで言ってみて下さい）と思うことがある。

その最たるものが「ピースメイカー」、直訳すれば「平和をもたらすもの」。実は1873年に誕生したコルト社の45口径リボルバー拳銃（SAA）の通称である。

もともと陸軍の支給品だったが、世間でこの銃が有名になったのは西部劇の世界だろう。映画『荒野の用心棒』のクリント・イーストウッドのように、当時のガンマン、保安官たちは「町の平和を守る」ためバンバン撃ちまくった。だから、「ピースメイカー」。

1873年という明治6年だが、驚くことに連綿と現

代も生産が続いている最古の現役銃である。米国人の銃に対する偏愛はハンパでない。やれやれ。

米国には「ピースメイカー」と呼ばれるものが、もう一つある。B-36ピースメイカー、なんと戦略爆撃機。までも、やれやれ、である。

爆撃機といえば、日本に原爆を投下したB-29が有名だが、B-36は全長50m（B-29は30m）翼幅70m（同43m）。あのB-29が小型機に見えるほど巨大で、当時は水爆が搭載できる唯一の爆撃機だった。それにして米国人のネーミングのセンスってひどい。

「ピースメイカー」には「調停者、仲裁人」という意味もあって、トランプ大統領はしばしば「私はピースメイカーになりたい」と口走っている。理由はウクライナの平和より、「ノーベル平和賞が欲しくてたまらないから」。それがブーチンにはバレバレで、足元を見られている。

だいたいガザ停戦で「お前ら、地獄を見るぞ」などと一方を恫喝する「ピースメイカー」がいるわけがない。

「ワガヤの箱」

県立美術館の開館で、県が3億円で買ったA・ウオーホルの「ブリロの箱」がずいぶん有名になった。

1955年、貧乏な新聞記者と、小学校の女教師が結婚した。長屋暮らしで家具も買えず、新婦は画家だった叔父に頼んで、岡山大の美術専攻で木工造形を学ぶ学生に実費で「箱」を8個つくってもらった。

リング箱のようなその箱は、組み合わせるとダンスや卓袱台など何にでも化け、私が生まれると勉強部屋の本箱、私に娘が生まれるとおもちや箱と、3代にわたって使われた。70年経った今も、わが家でダンスや急な来客時のイス、窓際のキャビネットとして活躍している。

ある時、図書館で借りた建築家のル・コルビュジェの本を読んでいて、持ち手の穴こそないが、そっくりな「箱」を見つけた。晩年のル・コルビュジェが1952年、南仏に建てた休暇小屋の「箱の家具」だった。そうか、当時の岡山の美術大生はきつと「ル・コルビュジェの箱」のことを知り、オマージュとしてこれを作ったに違いない。

ル・コルビュジェは「モデュロール」という人体の寸法や黄金比に基づいて設計したというから、道理で何でも合うはずだ。70年目にして「わが家の箱」のなぞは解けた。

「損して得とれ」

「アメリカはアホとちゃうか」と、大阪勤務時代に仲良

くなった企業経営者が言う。なんのことかと思えば、トランプがウクライナで将来行われる主要インフラ投資全ての優先的交渉権を要求していることだった。欧州など他のウクライナ支援国は排除されるらしい。

「将来、和平が訪れてインフラ再建が始まったら、ウクライナ国民は『アメリカさん、ありがとう』と自然に米国企業に優先的に仕事を頼むはず。なのに、和平も実現していない今から、支援した分の元を取る、と言って要求する。トランプはほんとに商人なのか？」

大阪では「損して得とれ」という言葉がある（最近の『維新の大阪』は、どうもそうではない感じたが）

つまり、相手に「ここまでしてもらって、ほんま、おおきに」とまず思わせ、「だったら、お返しせんとあかんなあ」とこっちに囲い込む。「損金」は最初から折り込み済みで、きっちり後から元は取るものの、「双方、気持ちよく商談成立、めでたし」となる。

「そんなことも分からんようになったら、世界に冠たる米国資本主義ももう終わりやないか」と、その人は言う。

Walk on By

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

今年に入って、米子方面に行く回数が増えた。三月だけで三回。仕事のような、遊びのような。

八日(土)は「ぐるぐるかいけ」。皆生温泉エリアを活性化するプロジェクトの一環として行われているマルシェで、友人を介して誘っていた。

米子地区では初出店。どんな本を持っていくか悩んだが、まちづくり関連と、家族連れが多いと聞いてちょうど買取したばかりの絵本と、店のオススメや定番を選ぶ。

会場は外。というか松林の中。テントを立てて本を並べ、いざスタート。中央のスペースではまちづくりに関わる人たちのトークイベントが行われていて、よく見たら市長も参加している。小さなベンチにちょこんと座っていたのでしばらく気付かなかった。登壇者と呼ばれたとはいえず、街の小さなイベントにも出席するのは偉いと思う。

出店者がほとんど飲食で若干アウェイ感があり、売上は

ボチボチでした…

翌週の土曜日は境港へ。ある方々が来られるとのことでお誘いいただき、十時半に現地集合。場所は本と雑貨のセレクトショップ「二月と六月」さん。行政関係者・建築家・出版系NPOの方など、それぞれの立場から店主の一人、阿部さんにお話を伺う。

何軒かあった長屋を買い取ってリノベーションしたそうで、ちよつと変わった構造の理由が分かった。二階にもう一部屋あるが、壁でふさいでしまったのでどうなっているのか分からないらしい。

山形から来られた建築家の方との会話から得るものが多い、本屋単独ではなく、歩いて行ける範囲で多様な店が存在するエリアマネジメントの観点や、行政との付き合い方／攻略法など、勉強になった。

ほかにも常連客と観光客のバランスや本の在庫の持ち方、後継者問題など、話は多岐にわたったが、それぞれ予定があるので正味一時間で現地解散。私は店に戻って通常営業。

さらに翌週の水曜日、再び境港へ。

五月に境港でお話させていただくことになり、あいさつ

も兼ねて会場となる上道町のCafeマルマスさんで昼食をとることにした。元同僚のTさんと、NPO方面で知り合ったIさんをお誘いし、現地で落ち合う。

二階に案内されると、近くでおもちゃ屋を営むWさんと写真家のMさん・シンガーのOさんとバツタリ。この周辺の三店舗で写真の展示を行うための打合せ中とのこと。

別方面で関わっていた人たちがなぜか勢ぞろいして、各々ご挨拶と名刺交換。あちこち話が飛びつつ、美味しいカレーをいただいた。

ちなみにCafeマルマスのオーナーさんから「うちの娘が高木さんが店長の時にアルバイトしていて、とてもお世話になったと言っていました」と教えられ、鳥取の狭さにビビる。二十年以上前の話なので、さすがに名前だけでは思い出せず。

本題（ここは割愛）を済ませて、行ったことのなかった境港の図書館へ。開放感とプライバシー配慮のバランスがちょうどよく、気持ちの良い空間だった。

その後は上道町に戻って、Iさんが運営しているコミュニティスペースのような場所、「小僧文庫」に案内していただく。リノベーションした長屋のひと部屋で、月に二回ほどイベントをされている。居心地がよくて、まったくお

しゃべりしてしまった。

仕事と遊びの境目をふらふらする、そんな三月だった。

追記

米子の出版社・立花書院さんの取り扱いを始めました。ぜひ郷土本コーナーをご覧ください。

【参考文献】

『陶芸家 高野友美にきく 地方と独立』ヒマール
一月と六月さんで購入したZINE。「陶芸をやりたい」と思ったきっかけが「そこ」という驚きと「なんか分かる！」のちょうど半々。地方で独立することのリアルが語られていてとても面白かったので、当店でも仕入れました。

『日本のまちで屋台が躍る』
ぐるぐるかいけを運営している又吉さんが作った本。

定有堂ビル2階 古書・新刊の本屋

SHEEPSHEEP BOOKS 店主 高木善祥

本を作る側から (25)

村瀬 謙介

(小取舎)

三月は忙しかった。確定申告は苦ではなかったのだが、次々と小取舎としての新しい仕事が入ってきて、もう小取舎への新たな依頼を半年待ちにしたいくらいである。入る余裕は詰め込んだらあるが、余裕がだいぶなくなってきた。編集者、経理、書籍デザイナー、営業を一人でこなすなんてことは正気な人がするものではない。日々の暮らしというものがあるので他の仕事もやったり文化的な役員も引き受けていたりして、打ち合わせ日の調整ですら候補日が少なく、これではイカンと。余裕は余裕として残しておきたい。売するための仕掛けなんかももっともつとでできるはずだし、ホームページ代わりに使っているnoteも更新できているし、小取舎のインスタグラムもなかなかネタに困っている。最近話題になっている三重県のパートにできた「食べる本屋さん」からも小取舎の本を置いていただきました

という話があったが、一ヶ月以上たつがポップも作らなくてはいけなくてまだ送れていない。

そんな誰に対してでもない愚痴を言ったところで何も変わらない。前回の音信不通でも書いたが、何かを捨てないと新しいことが入ってこない。試せることが全部試せていない。

これじゃあいけないということで、捨てるか、詰めるか。昨年から結構捨てたなと思うのはライフワークだったDJの時間か。昔は毎月夜十時から朝五時までやっていたが(どうかしている)、今は主催イベントを年に二回程度、主宰ではない呼ばれたイベントも二ヶ月に一度で持ち時間も三〇分程度しかしていない。そういえば去年からYouTubeもあまり観なくなつた。チームを作つて実況もしていたゲームなんか全くしていない。SNSはインスタグラムをチェックするだけ。Xもほとんど見ていないし、Facebookもインスタと連携こそしているもののFacebook自体を開いて見るのは一週間に一度あるかないか。いや、これはいずれも以前の利用時間が多すぎたのだ。昨年の秋から日記を英語でつけていたのだが三月から面倒だからやめた。英語学習で一番くじける要因なのは文法でも発音でもなく、「やっているけど使う時あるんかいな」という心の囁きである。ちなみにやめた途端に使うべき時が来るのも英会話である。

他に何を捨てれば良いかわかっている。睡眠時間だ。若い頃に比べ、徐々に睡眠時間が増えていく気がする。これはつまり疲れやすくなっている、疲れが取れていないということ。夜十時前に寝落ちすることが多いので、零時に寝るだけで二時間稼げる。というか、赤ちゃんが起きている時間に家で仕事できんて。小さい子どものいる自宅フリーランスの方どうやってるの？

もう一方、「詰める」ためには、「隙間時間、移動時間を削る」、「作業の効率自体を爆上げする」の二点。パソコンのクリーンアップのように一日の中のゴミのような隙間時間を減らして空き容量を増やすのだ。前述のSNSもそうだが余計なものを見ない、考えない。移動についてもロスしている時間の一つだ。というのも、意外に思うかもしれないが私は車を持っていない。あまり使わなかった時期に駐車場代だけずっと払っているのもなあと思ひ廃車にした。家には二台あるので納品など印刷所からの大量の本の運搬が必要な時に家族から借りている。しかしこの春から家族の都合でいつでも借りられるわけではなくなり、そうなるもフットワークが重い。そこで、スイッと営業活動も含めた書店巡りや本を置いてくれるお店巡りなどするため、春からの移動時間を削る算段はできている。「村瀬、人生初のバイクを買う」作戦。車より維持費も安いし、一

度に何百冊も運ぶことは滅多にないので十分。デメリットは雪が積もったら乗れない（乗りたくない）ことか。

作業の効率自体を爆上げする方法も実践していて、これは積読で悩んでいた私の読書の仕方を変えた上岡正明『死ぬほど読めて忘れない高速読書』（アスコム、二〇一九）の内容を小取舎の仕事に応用してみている。本の内容を簡単に要約すると、三〇分で一冊を三回読んでアウトプットすることというのだが、実際仕事も（どの仕事も三〇分というわけにはいかないが）、なるべく短時間で三回回せるように実行すると格段に早くなった。本に例えると「初稿があがるのが早くなった」のだ。

さて、余裕が出来始めるのは夏頃か。いや、効果が出過ぎて今より忙しくなっている気もする……。

・小取舎の刊行物

『宇沢弘文「社会を治す」

社会的共通資本の再解釈』

岩田直樹 著

二〇二四年七月二九日発売



マンネリじゃないです素振りです

古賀 啓三

(米国ミシガン州在住)

丸谷才一亡きあと、新刊が出れば直ぐ、ためらうことなく購入する日本の作家は奥泉光と村上春樹だけになった。昨年末帰国した際、長崎浜町(はまのまち)のアーケード街地下にある、小体だが雰囲気の良い書店を覗いていると(同行の知人曰く、地下の本屋はたいいてい「あたり」)、「新刊出てますよ」と僕が奥泉ファンであることを知っている知人が棚を指差す。手に取ると、『虚史のリズム』はずっしりと重く、A5版で千百ページ、厚さ五センチの大部が「満を持して」感を体現している。前作『雪の階(きざし)』から六年ぶりの大長編。

最近読んだ本のことを書く際の、ほぼ毎回「昨年末帰国した際買った」という前振りにお気づきかもしれないが、酒食以外の日本での楽しみは「本屋に行つて」本を漁ること。アマゾン海外発送のおかげ(社主ベゾスのトランプ寄り言動でこちらでは不買運動など起こりつつあるが・・・)

で国外からの日本語書籍購入も便利にはなったが、やはり本との出会いは本屋でぶらぶらしながら、が真骨頂である。父の介護をしていた際は、歩いて二分のところにキューブリック箱崎店があったので、もうどの棚に何があつて何がないか品揃えを知り尽くしているくせに毎日通つた。福岡ではここと博多駅の丸善。キューブリックにないものを、を丸善で。次回から九州の最頂にこの長崎の地下書店好文堂も加えよう。今度の帰国でも、日本中あちこちの本屋で二十冊ほど買い込んでしまったが、翻訳モノは嫌いなくせに、日本人作家による本はなんとこの一冊だけ。僕にとつて翻訳本は全てお勉強である。リヨサからフローベール、ヴァーヅニア・ウルフとこのところ横を縦にしたものばかりだったので、『虚史のリズム』は読み始めると『雪の階』で離れたくなかつた世界とよく似たところにたちまち引き込まれ、ぐいぐいと、獲物を追う猟犬のように目が字を追って先へ先へと読み進む。日本人作家による作品も、翻訳モノも同じ日本語で書かれているのに、読む際の、のめり方、というかドライブはあきらかに異なる。翻訳では、つい目が見からゆらゆらと虚空に遊離してしまい、原語の表現はどんなだったんだろう、などと余計なことに気を散らせてしまつて、とか、あまりしたくないことをしているとときに、部屋の掃除を始めてしまうのに酷似している。

ウルフの『灯台へ』は、意識のながれ、などという茫漠としたテーマ自体より、そのながれと共に移り変わる視点、という技法の方に重きが置かれた（というのは僕の誤読、もしくは牽強附会の可能性大だが）、リョサのドグマ、「作品の文学性はテーマよりも、テーマを処理する技法にある」を体現した作品で、リョサ自身にも『緑の家』等、視点だけでなく時空も含め、目まぐるしく移り変わる作品があり、と、意図したわけではないのに、シンクロニシティックに「本が本を呼ぶ」という、本読みにとっては垂涎の法悦に導かれたのだが、これがさらに長崎で偶然手に取った『虚史のリズム』の奥泉は、現在日本の文学シーンで複数視点の旗手、と（僕に）呼ばれる作家なのであった。これはちよつと長いが、鴻巣友季子（『灯台へ』の訳者。シンクロニシティだなく）による、前作『雪の階』の書評からの抜粋：作者が本作で初めて採用した、「三人称複合多視点文体」は、たんに、一人称的な内面視点を並列したものではなく、見事だ。作中、ヴァージニア・ウルフへの目配せがあるが、かの人もかくやという自在き。ときには助詞ひとつで視点がちり替わり、語り手から作中人物へ、さらには幾人もの人物の間を「目」が行き来するスリル。時空を超えて、相

対すはずのないふたりが言葉を交わす。

新刊が出ると無条件に購入はしているが、ここ数年の作品は、同工異曲、というより同じものを繰り返し読まされてるような気がしないでもない。村上の作品のことだが、しかし今のところ無条件購入を見直すつもりもない。『虚史のリズム』を読み始めると、あ、また懐かしいあの場所に立ち戻った、と思わせる世界がそこに拡がっていて、ああこの作家もついにそういうフェーズに踏み込んだのか、という感慨を抱かざるを得ない。山口瞳は、生きてるうちに二、三本納得のゆく小説が書ければめつけもの、色川武大も同じようなことを書いていた（二百年くらい生きれたらまともな小説が一作くらい書けるかも、と）。書かれるものの「臍の緒」は、その作家の実人生と密着しているもので、書かれることを触発するような体験はそういうつもあるわけではなく、同じ「臍の緒」に根付くイメージが繰り返し使いまわされるのは致し方ない、と自分で小説のようなものを書いてみて、思うようになった。あ、俺また同じようなこと書いてんな、という自己嫌悪を克服するには、類型は全て練習だと開き直るしかない。繰り返しているうちにいつかクリーンヒットへとつながるのだ。といいな

汽水のほとりから（48）

小原 修治

（県立高校教諭

湯梨浜町松崎在住）

先日、米子市の写真家庄司丈太郎さんの御自宅で鳥取市にある岩井窯の山本教行さんのお話を伺う機会があった。庄司さんが開催されている小さなギャラリー・Selling 話を聞く会のことは前にも書いたが、これはその十八回目で、山本さんは八十年近い人生を自ら回顧されて話をされた。中でも、昭和四十一年秋、数年前に始まった吉田璋也氏との交流を通して知った英国の陶工バーナード・リーチ来日の報に、矢も楯もたまらず汽車に乗り、所持金が無いので大阪から東京まではヒッチハイクで旅し、幸運にも都内のリーチ先生の宿泊先ホテルのロビーで二人きりで会えた話とはとりわけ面白かった。ちなみに、帰りは先生の発案で鳥取までの汽車賃を皆にカンパしてもらったそうである。

昭和二十三年生まれの山本さんは当時十八歳。が、既に吉田璋也氏は六十八歳、リーチ先生に至っては七十九歳

だった。岩井窯を愛する作家の平松洋子は、山本さんを「その人生をもって『民藝』の道のりを生きてきた最後のひと」と評したが、山本さんら団塊の世代は、大正末年に柳宗悦の唱導によつて始まった民藝運動の担い手たちの聲咳に接することが出来た最後の世代である。けれども、そのチャンスを人生に結びつけることが出来た人は何人あるか。師に導かれた道を不屈の意志で、しかも独立独歩で、晩年まで貫かれた山本さんは、稀有で幸福な人である。

が、その山本さんの真髄に触れたのは、むしろ講演後の質疑応答の時だった。トップバッターに指名された私は、「私の父親も民藝が好きでしたが、山本さんの出発点にも民藝の影響があつただろうと思います。今で民藝に対する何らかの想いはありますか」といった質問をした。すると、山本さんの答えは意外にも次のようなものだった。「私は若い頃から民藝にはあまり関心が無かつたし、今もこれといった想いは無いんです。リーチ先生の作品ははじめから好きだったが、民藝だから好きということは無かつたし、私の作品も民藝とは思ってません。作品を好きかどうかはすべてで、本来そのことと民藝とは関係無いんですよ」と聞きながら、私は恥ずかしくなつてしまった。「民藝」という言葉を振り回す自身の頭の中身をたしなめられた気がしたからだ。「情報は捨てなければいけません」とも言

われたから、それは疑いない。「柳宗悦が好きなもの」がすべて良いわけではないし、私には良いと思えないものもありますよ」とも言われた。言葉（概念）に捉われるよりも、良いと感じる自分の眼を信じてものを見ることの方が大切だと言われたのである。どんなに偉い人でも、誰かが良いと言っているものを良いと言うだけなら、それは他人の眼を借りてものの良し悪しを決めることに他ならない。

後日、「頭で考えるな。眼だけになれ」という青山二郎の言葉を思い出した。青山は、小林秀雄の親友で、十代の頃から骨董の目利きとして知られ、柳宗悦に可愛がられて初期の民藝運動を支えた人の一人だが、すぐに離脱した。「民藝」という言葉が一人歩きし、「頭で考える」人たちと群れるのが嫌だったのだろう。小林秀雄は青山の影響で骨董を始めたというが、そのことと小林が晩年『本居宣長』を著して漢意（からごころ）批判について思索するようになったこととはつながっている。なぜならば、青山の言う「頭で考えるな」とは、他人の眼を借りてものを見るなどいうことだったが、本居宣長の漢意批判もまた、他人の頭を借りて物事を判断するなどいうことだったからである。

宣長は著書『玉かつま』で、「漢意とは、漢国のふりを好み、かの国をたふとぶのみにいふにあらず、大かた世の人の、万の事の善悪是非を論ひ、物の理をさだめいふたぐ

ひ、すべてみな漢籍の趣なるをいふ也、さるはからぶみをやみたる人のみ、然るにはあらず、書といふ物一つも見たることなき者までも、同じこと也、（中略）我はからごころもたらずと思ひ、これはから意にあらず、当然理也と思ふことも、なほ漢意をはなれがたきならひぞかし、（後略）」と述べている。漢意とは、理念的な言葉（概念）＝思想によつて物事の是非を決めたがる人の心性を指すのである。書物を読まない人も含めてそうだと宣長は言うのである。

私は月に一度、『論語』の講義を琴浦町の河本家住宅という場所で続けているが、講師を引き受けて間もない頃、この講座の前任者である小谷恵造先生に、今回の山本さんの質疑応答の時のように、たしなめられたことがあった。「子曰はく、觚、觚ならず、觚ならんや、觚ならんや」という章の解釈について、私が「正名」という思想があると口ばしした時のことである。小谷先生は「そういう言葉で解釈してはいけませんね」と後で指摘された。孔子の言動は「正名」という思想とは別物だと注意されたわけである。同様に、民藝とは山本さんの生き方そのもので、「民藝」という思想＝言葉（概念）とは似て非なる別物なのである。

書庫をさすらう

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

書庫をうろつき回るのが好きである。

開架の書棚を見て回るのも、それはそれで楽しいが、書庫の本には独特の雰囲気がある。

役目を終えて、安らいでいる本の佇まい。

納骨堂のよう、と言ったら本に失礼か。まだ、死んじやいないよ、って。

何より、静かである。

「文字禍」のように、本の囁きでも聞こえれば嬉しいが、『書物戦争』の名残のように、床に四、五冊でも落ちていれば楽しかろうが、なかなかそういうことには遭遇しない。突然、空調が吼え出すくらいが関の山である。

ちよつとした伝説はある。

曰く、何もない平坦な床で、誰もが決まって踱く場所がある。何か居るに違いない、とか。

曰く、書庫内で迷って、半日間、出てこれなかった職

員がいる、とか。

とまれ、現代建築の書庫というのは、総じて、機能的で、明るく、広々としている。裏を返せば、面白味に乏しく(並んでいるテキストを別にすれば、である)、怪談話などは凡そ似つかわしくない味気無さである。

一方、昭和六年生まれの古い図書館の書庫は、それはもう、すさまじいものでありましたよ。

先ず、天井がとんでもなく低い。一七〇センチだと、頭が当たる。通常の二・五階建て位の建物を四階に仕切っているのだから、そういうことになる。

本の重さは半端ではない。極力、床に負荷を掛けないために天井高を抑えているのである。

で、この古い書庫、昼でも薄暗い。小さな窓が申し訳程度に付いているが、鉄の扉が閉まっている。(ちなみに、入り口の扉も横開きの鉄扉であった。重いなんのって。これらのお蔭で、市内を焼き尽くした猛火を生き延びたのである)

下層に降りる石の階段は歪んでいて、真ん中は大きく擦り減っている。延べ何千人、何万人の職員が上り下りしたのだろう。

古い書庫といえば、某国立大学の研究施設に付属する図書館は非常にロマンチックなものであった。

戦前からあるこの施設は、スペインの僧院を模しており、中庭を取り囲む回廊には、重々しい木製扉が並んでいて、僧房ならぬ研究室となっていた。二階にはゴシック式のヴォールトを備えた壮麗な閲覧室があり、付属の書庫は塔屋になっている。この塔は、真ん中が吹き抜けになっているて、周りを何層もの積層書架が取り囲んでいる。

これは、書架自体を柱とする構造で、床には人間の荷重しか掛からない。収納率を高めるための方法であり、開架室に比べて、天井が低くなるのが特徴である。

面白いことに、ここは人工の照明がなく、自然光のみが僅かに入る。床には、厚い曇りガラスが嵌め込まれていて、天窓の光が最下層まで届くように工夫されていた。閲覧台も、吹き抜け部分に面して設けられていて、要するに天からの光で読め、ということなのであった。

戦前・戦中にアジア各地から蒐められた珍書古籍が汗牛充棟の、研究者であれば、ここに住み着きたい、一生外に出られなくても構わない、と考えるであろう書庫であった。

某県立図書館は、なぜか郊外の住宅地のと真ん中にあり、

その外観たるや、葉巻型の宇宙船のようであった。

閲覧室は果てしなく長く、遙か向こうは霞んで見えなかった。書庫も同様に果てしなく長いので、職員は自転車で移動していると聞いた。

某(は要らないな)国立国会図書館の書庫は、地下八階。中心部が、屋根なしの吹き抜け状態で、太陽の光が最地階に届く。ロの字型のビルディングをそのまま地下に埋め込んだような按配である。こちらは、職員の労働環境への配慮と聞く。

ここも、珍籍奇書は星の数、何せ、内務省検閲本がそっくり移管されているから、その道の人間にとっては堪えられない。ただ、書庫は極めて機械的、合理的に管理されていて、和本でさえ、スペース節約のため、ホルダー付きで縦差しという、ロマンとは無縁の世界。まあ、膨大な物量のの前には、ロマンなぞ塵芥みたいなものです。

内坪井町日記

(11)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店勤務)

別の病院にて耳鼻科の診察。CT画像を見ながらなぜか先生は不機嫌そう。これはおそらくカビではない。線維性骨異形成症なんじゃないかとのこと。骨が変形して組織が盛り上がってきているのが影として映ってるんじゃないのかな。と言われるが、そんな病気知らなかったものでぼかんとしてリアクションができない。

耳鼻科として内視鏡の手術をしてもたぶん意味がない(鼻炎的な症状は改善しない)が、上顎洞がどんな状態になっているのかを見ることはできるし、組織を取って良性のものであるかを判断することはできるかな、そして上顎洞が要手術となった場合は耳鼻科の守備範囲ではないです、それを理解いただいた上で手術するかしないかは自分で決めてください。と言われた。まず病名というか症状の名前がわからないし、手術するべきなのかどうかも自分では判断できないし先生はイライラしているしで面倒に

なったので帰っていろいろ調べてみて返事することにした。帰宅後にインターネットで調べたら基本的には経過観察で済む病気のようなのだが、手術が必要になることもあるらしい。これじゃ判断つかないので別日にまた最初にいったかかりつけの耳鼻科にて判断を仰ぐことにする。

三月某日

かかりつけの耳鼻科へ行って報告。言われてみるとたしかに線維性骨異形成症なのかも、とのこと。カビの場合と比べてCTの影の範囲が狭いらしい。気づかなかったのかい!とも思ったが口には出さず。

こちらの先生も線維性骨異形成症の可能性が高いとの判断になり、要経過観察で半年後にまたレントゲンなど撮ってみましようということになる。

そういわれると思い当たることがあり、耳の奥や付け根、顔面の左目の下のところが痛んだりすることがあるのはその病気のせいだったのかも。しかし変形した骨は戻らないので、これは一生付き合う系なのか。長年のひねくれた根性がこれを齎したと諦め、自戒のためによりお付き合いをしていきたい所存です。

三月某日

幡ヶ谷フォレストリミットにてライブ。LOWLOW
INGEN（以下ルロウズ）主催のイベント「MITOH
O SESSIONS」に呼んでいただく。共演はルロウ
ズと熊本からサマリ、DJがスッパさん。

オープン前からスッパさんのDJを聴けるありがたさ。
ソウルコフィングのスーパーボンボンからプリファブスプ
ラウトのノックオンウッドに繋いでいて、もうわたしは完
全にスイッチがオン。

ルロウズは以前熊本で観たことがあったのだけど、音像
がすごすぎて、鍛錬と脱力のバランスが素晴らしい。なぜ
我々を呼んでくれたのかわからなかったし、当日も聞きそ
びれた。最近僕らの音源を何度も聞いてくれていたとのこ
と。ありがたい限り。

サマリはドイサイエンスのリーダー清田さんのソロ活
動。ファンです。なんと形容していいかわからない音楽ル
ロウズの赤倉さん曰く、アヴァンギャルドでオブスキュア
なポストブルース？ 確かに根のないブルース感がある。
そして清田さんは筋力がすごい。

トリの我々と言え、前日と当日に合わせて九時間も練
習してしまつたのと、今日の出演者の音楽に集中しすぎて
私の体力が本番前に尽きてしまい、へろへろだった。ほん
とくにすみません。お客さんは楽しんでたようだったが。

終演後も例によってDJでダンス。

この日は僕の不義理で疎遠になっていたむかしのともだ
ちが来てくれていた。ジャンプして抱きついたね。なんか
すこしじかんがとけてうごいたぞ。

三月某日

長男の卒園式。おめでとうーという気持ちより、ながい
こと日曜だけのやすみでよくがんばってえらいね、すまな
いねという気持ちや、これから小学校にはいけないといけ
ないのか、学童保育とかたのしいのだろうか心配、という
気持ち。

長男のクラスは親同士も仲が良く、式のあとは先生たち
の謝恩会から三次会まで大勢で飲む。

ディストピアとの出会い

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

二月に文学フリマ広島に出店するとき、ブースのジャンルを「小説・その他」とした手前、私は簡単な小説も書いた。女子校時代のことをいつか振り返って小説にしたいと思っていたので、『僕ら、乙女の純真』としてまとめた。

(現在 SHEEPSHEEP BOOKS さんのみで販売中)

掌編を連ねただけの作品だが、エピソードのベースには私の経験があるものの、ほとんどがフィクションである。ただ、中高生当時の私は、自分が描いたほどには反抗的な態度を取らなかった。かわいらしいレベルでの反抗であっても、面倒が嫌だった。

ディストピア小説との出会いは、この女子校時代だった。

高校三年生の英語の授業では、英語学習者向けの Oxford Reading が扱われることが通例となっており、私たちの学年は、ジョージ・オーウェル『1984年』が教材となった。ビッグブラザーのものと監視社会の中で、言語・歴史さえ改竄される。主人公はそのなかでささやかな反抗とともに恋に落ちるが、英雄的な最後はありふれた名前の主人公・スミスには訪れない。

SFの力、面白さに気付かされたのはこのときだった。

一九四八年、連合国の勝利に終わった第二次大戦後も、ファシズムの脅威を描き、監視社会を批判するオーウェルの視点の鋭さ、それらを描くためのSF的装置に魅了された。

その作品に魅了され、その一九八四年に執筆を始められたのが、マーガレット・アトウッドの『侍女の物語』だ。キリスト教原理主義者に支配されたと思いきアメリカは「グレイアデ」と名前を変え、戦争状態にある。そこには「侍女」と呼ばれる女性たちがいる。彼女たちは、「司令官」の家に配属される。核戦争、環境破壊により、妊娠可能な女性たちが極度に減少した世界において、「司令官」の「妻」の多くも妊娠可能ではない。過去に出産経験のある「侍女」たちは「妻」の代わりに出産を求められる。それは、「妻」が立ち会うレイプのような様相を見せる。

アトウッドは、作品内に登場させる抑圧の装置について、「歴史的に実在したもの」を登場させたと語っている。ただ発表当時は、アメリカがこのような国になることはないだろうと考えられてきたが、改めて注目を浴びるようになったのは、第一次トランプ政権の時である。

女性たちの中絶の権利が危機に瀕した時、この作品が思い出された。『侍女の物語』の中では、グレイアデ政権前に、中絶手術をおこなった医師が処刑されている様子も描かれ

ている。そこから、トランプ政権に対抗するデモにおいて、この作品の侍女の衣装である赤い装束がつかわれるようになった。そして、三三配信のもとで、新たなドラマシリーズも作られた

さて、二〇二五年現在。トランプは返り咲いた。大統領令というものが、ここまでたやすいとは、誰が気づいていただろうか。中絶を禁止する州も増えた。リベラルを自称した企業のトップたちもトランプに同調する姿勢を取る。先日、アーリントン国立墓地はそのウェブサイトで、黒人および女性軍人の歴史に関する情報を削除した。これは、トランプ政権が政権内の三三を禁止する流れによるものだと言われている。事実は小説よりも奇なり。

一方で、アトウッドは、ドラマシリーズに影響を受けて、続編の『誓願』を執筆した。『侍女の物語』が一人の女性の視点でしかなかった一方で、『誓願』は三人の女性が語り手となる。連帯の先には、一筋の光が見える。

『1984年』『侍女の物語』『誓願』の三つに共通する部分はあまりにも多いが、アトウッドが意識的に真似たと語る構成は、物語とは別に付記として書かれた部分をもつということだ。そこでは、ディストピアのその体制が、学術の対象の「過去の遺物」になったことがわかる。

それはつまり？

囁き合うような侍女たちの会話は、私にとって身近なものに感じられる。あなたは体制の信望者？ それとも？ そんな探り合いは、どこか女子校時代の友人たちと話していた時の「あの感じ」に似ているのだ。今回、自分で小説を書きながら、ディストピアに惹かれる理由がわかった。私たちは擬似的にそれを経験していたのだと。

校則違反の密告で学年の半分が報告され合うこともあったし、修学旅行先の長崎で「カフェでうるさかった」と学校に報告の電話が入ってしまったこともあった。制服を着ている人も、着ていない人も、すべて通報者になりうると心得ていた私は、中高では帰り道の買い食いすらも億劫な人生を送っていた。

そんな風な擬似的な監視社会で生きていた私たちに、何故先生は『1984年』を読ませたのだろうか？

私たちはあのディストピア的世界から脱出したはずだったが、外に出るだけでは、自由は得られていない。共に考え抜こう、友よ。そして、生き抜くのだ。

『とつとり、ひとり』

三浦永理・著



めだかのマーチ

あきの素生

(くうねるめがね)



極力動かず、暖かい季節よりも、警戒心が増しているようでもある。以前、めだかは「外敵から身を守る必要がない環境では群泳することはないらしい」と書いた。水草の下に集まり小刻みにひれを動かしている小さなめだかたちは、みなで協力して寒さから身を守っているようだった。

めだかのお腹がふつくらしてきた。春が来るのだな、と感じながら、気持ち多めにえさをやる。冬の間は水草の下でじっとしていためだかたちが、ふと見ると水面にゆったり浮かんでいる。えさにも果敢に食いついてくるし、冬を無事に越してくれたことへの安堵もあいまって、めだかを眺める時間が再び増えてきた。

冬はあまりえさを食べないと何かで読んだ。産卵をする時期は一日に二度あげていたえさを、一度だけにしたにもかかわらず、そのほとんどが水鉢の底に沈んでふやけていく。水が汚れるばかりなので、本当に大丈夫だろうかと不安に思いつつも、与える量を限りなく少なくした。からだはやせ、めだかの小ささを思い知らされる。けれどもたしかに、次にえさをやっても、それに興味を示す様子はない。

夏とは違い、大掛かりな水換えや掃除は不要、減った分だけ足し水するだけでよい、との飼育ノウハウを、ここぞとばかりに取り入れた。空気が乾燥する時期だけあって、鉢の水はどんどん減る。少し油断すると、二センチ程度はすぐに水面が下がるので、こまめに足し水をする。いつでも使えるように、水道水をカルキ抜きして常備している。最近でも、喉が渴いてしょうがなかったり、唇が切れたり、乾きを感じる人が多いが、あの水の減り具合を思い出して、妙に納得している。

タンクメイトたちにとっても、冬は厳しい季節だ。わが家の水鉢には、めだかのほかに、ミナミヌマエビとヒメタニシがいる。鉢に生える苔を食べてもらうためにお招きした、いわゆる“お掃除生体”だ。

ミナミヌマエビは繊細な生きもので、水質や水温の変化

に敏感。寿命は一年程度だとこれまた何かで読んだ。秋頃になくなってしまふことが多いとも書いてあったのである程度覚悟していたのだが、一匹だけ、凍てつく夜も霜降る朝も、寒さなぞ感じぬ風情で変わらぬ姿を見せ続けてくれている。いつ見ても、普通に「いる」。あまりに通常運転なので、途中で覚悟することをやめた。特別元氣な子が、わが家に来てくれたのだろう。

ヒメタニシは、ミナミヌマエビに比べて環境の変化に強いイメージがあつたので、そもそもあまり心配していなかった。しかし、冬になると、ぱたりと姿が見えなくなった。鉢の底には、「ソイル」というBB弾くらい大きさの丸く焼き固められた土を入れている。泥や砂と違って潜りにくいだろうのに、そこで冬眠していたようだ。二月からの二度の寒波ののち、春を飛び越して初夏のような陽気になった日に、何事もなかったかのように姿を現し、苔をもりもり平らげていた。生きていたのかと面食らい、束の間あぜんとしていたが、じわじわとうれしさがこみ上げた。夏の頃に一度、水鉢の外に落ちていたのを拾った。どのくらいの時間落ちていたのかわからない。だめかもしれない、でも、と水鉢に戻したところ、次の日には、再び水鉢の中を這っていた。タフなやつだ。

めだかたちは、このところの暖かさを享受して、目に見えて活動的になっている。まだ寒さのぶり返しがある時期なので、あまり浮かれていると痛い目を見るのでは、とり気を揉んでいる。

本格的に暖かくなったら、新たなタンクメイトや水草をお迎えしたいと考えている。冬の間は、ミナミヌマエビやヒメタニシに仲間が増えるといいなと思いつつ、寒い時期だと来た途端に体調を崩すのではと、先延ばしにしていた。水鉢の中をどんな設えにしようかな、と思いを巡らすことも楽しい。

自分も春の陽気に浮かされているひとりである。

オムライスル



ドラメリア (座敷わらし)

卵が好きで、中でもオムライスを好んで食べている、と書いたのが二〇一八年。気がつけばかれこれ七年近く前のことだ。好きだがこのところ遠ざかってしまっているとあとがきで触れているのは二〇二一年、こちらはコロナで外食自体憚られた頃の話。あの感染症以降外食自体から足が遠のきがちではあるが、今も変わらず好きだ。オムライス大好き、卵焼きも茶碗蒸しも天津飯も好き、プリンも好き、卵かけ御飯はまあまあ。と自分の中でオムライスは少し特別な位置にある。

三月末に二日連続でオムライスる(今、作った動詞)機会があった。どちらもこの年度末で異動する友人達と。一日目は駅前の隠れ家的なお店での夕食会で、お洒落で美味しい料理の数々をいただいた後に、(自分としては)メのオムライスの出番。オーソドックスなデミグラスソースのトロトロ系オムライスは、ソースの味わい、ライスとのバランス、卵の柔らかさ加減、どれもわたし好みのひと皿だった。常々周囲にオムライス好きを公言しているのが功を奏して、「せっかくだから好きだけ食べていいよ」と寛大

な同席者達に許しをもらい、心ゆくまで味わった。

「グルメ評論家気取りか」と思われそうだが、オムライスは極力二度食べに行くようにしている。最初の訪問ではどうしても「ああ、オムライス。感動」と思い入れ補正がかかるので、決めつけてしまわないように、少し間を置いて。ソースが選べる場合はトマトとデミグラスと両方。長年のオムライスルを経て作った、自分なりのルールだ。……やはり字数が足りなかったので、ここで次回(本当か?)。



・編集後記:

いただいた猫の舌のチョコレートを、職場で一枚ずつ大事に食べています。このぐらい上等なおやつなら、むさぼり食べずに自制が効く……かもしれない(白目)。ドラメリア(編集長)『町の本屋という物語』『本屋のパンセ』(作品社)の書評を『作品社note』に林大地さんがお書きくださいました。2023年に26歳で『世界への信頼と希望、そして愛』アーレント『活動的生』から考える』をみず書房から刊行された人です。

<https://note.com/sakuhinsha/n/n896b25ae32a>
タイトルは「言葉と論理が挫折するところ」。奈良敏行(発行人)